

令和7年度実践研究奨励援助事業実施校 研究主題等一覧

■学校課題研究

No.	学校名・園名	校長・園長	代表研究者	研究主題
1	那須塩原市立東小学校	鍋谷 政善	同左	『高めよう思考力 広げよう表現力』 ～伝える、伝わるって、楽しい～
2	栃木市立皆川中学校	藤間 亮子	同左	主体的に考え表現し、自ら学ぶ生徒の育成 －UDラボ、授業改善、校内研修、継続的検証・改善－
3	栃木市立大平南中学校	毛塚 修一	同左	「主体的に学び、互いに高め合う生徒の育成」 ～自ら課題を設定し、自分の考えをきちんと発信できる 生徒の育成～
4	県立栃木特別支援学校	保坂 麻紀	同左	学校運営協議会を活用した、学校課題改善に向けた取組

研究分野 学校課題研究

研究主題 『高めよう！思考力 広げよう！表現力』～伝える、伝わるって、楽しい～

学校園名 那須塩原市立東小学校

校長長名 鍋谷 政善

1 研究目的

本研究の目的は、伝えることの意義を見だし楽しさを感じながら自分の考えや思いを表現できる児童の育成を目指すことである。その素地となる力を向上させるために認知機能トレーニング (SST) やソーシャルスキルトレーニング、ICT 機器の効果的活用、特別支援教育の充実等を全校で行い、全ての児童に表現する場面を設定し、伝わることの喜びを味わわせたいと考えた。友達と楽しく学び合う中で学力の向上、社会を生きぬくスキルの向上を図る。

2 研究内容

- (1) MIM (多層指導モデル) の実施とアセスメント (1年、2年 他)
- (2) 認知機能トレーニング(コグトレオンライン) の実施 (1～3年、6年・特別支援学級・通級指導教室)
- (3) 授業研究会
3つのグループごとの授業作り、研究授業及び授業研究会の実施
- (4) その他
 - ・表現教室
(外部講師による出前授業 6年生対象)
 - ・授業公開週間 (教師同士の学び合い)
 - ・配慮を要する児童への支援のあり方・手立ての工夫 (WEBQUの活用)
 - ・ユニバーサルデザインの理解と通常学級での生かし方
 - ・授業力、教師力の幅を広げる教師同士の学び合いと共有 (padlet等、研修等)
 - ・ICT研修 (講話と実践)
 - ・学力向上改善プランの作成と取組の実践 (とちぎっ子学習状況調査結果の分析と活用)

3 研究成果

デジタルネイティブの子供たちにとって、ICT機器を使ったコグトレオンラインでの学習は非常に取り組みやすく、楽しみながら学

習することができた。コグトレオンラインの認知機能強化トレーニングは6分野があるが、児童は苦手な分野にはあまり取り組もうとしなかったので、ミッションを出したり、意図的に指示したりすることで、バランスよく取り組ませるようにした。

授業研究では、特別支援教育の手法を取り入れながら個々に応じたよりよい指導について全職員で話し合っって授業づくりをし、改善点についても意見を出し合った。年度末の児童アンケートでは、「勉強していて面白い、楽しい」の項目で約9割が肯定的回答であり意欲的に学習に取り組むことができていたことが明らかになった。

SSTや表現教室は、児童同士の関わりのスキルの土台作りとして行い、これらは児童が自身を表現することへの抵抗を軽減するだけでなく、伝え合う喜びや楽しさを感じることもつながった。



1年 MIM指導の様子

4 今後の課題

よりよく表現するには、基礎的基本的な事項の定着が不可欠であり、それらをいかに活用できるかが鍵となる。本研究をとおして、児童が自ら思考し表現するための基盤となる力を身に付けさせることの重要性に改めて気付かされた。特に、粘り強さや社会性、想像力など、いわゆる非認知能力を育むことも重要といえるだろう。今後は、こうした力をバランスよく育成しながら、考えや思いを伝え合い、共に学び合うことのできる児童の育成を目指していきたい。



4年体育「ティーボール」作戦タイム

研究分野 学校課題研究

研究主題 主体的に考え表現し、自ら学ぶ生徒の育成

学校名 栃木市立皆川中学校

校長名 藤間 亮子

1 研究目的

- (1) 生徒の主体的・意欲的な学習態度を育成する。
- (2) 「UD」「生徒が考える」「生徒が表現する」ことを実現する。
- (3) 本校の実態に応じた、主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善を行う。
- (4) 「単元計画」の下、「見方・考え方を働かせる」授業づくりに向き合う。
- (5) 職員の同僚性(改善を是とする仲間意識)を育成する。

2 研究内容

(1) 「UDラボ」：支援等に関する研究協議

数学科・英語科のT1・T2 全員と管理職が集まり、努力を要する生徒に対する支援の内容や方法、授業方法等を検討した。通年で毎週(教科ごとに隔週)開催した。

(2) 授業改善

ア 授業事前相談・参観授業・振り返り

教員が主体的・対話的で深い学びを実現する授業を行えるよう、県学力向上推進リーダー(以下「学力L」)による「参観授業・振り返り」の前に、「授業事前相談」を実施した。全教員が、原則月2セット実施した。

イ 参観授業の観点の明確化と自己評価

学力Lが参観授業の観点を更新しつつ教員に提示し、これについて、参観授業の振り返り時に、授業者が自己評価を実施した。

ウ 見方・考え方を働かせる授業

単元計画の下、見方・考え方を働かせる授業の校内公開と授業研究会を、教員全員が2学期中に実施した。そのための指導案作成は、夏休みに学力Lを活用して行った。

(3) 学校課題解決のための校内研修

夏休みに半日3回、それ以外で5回実施した。内容は本研究に沿った、授業のねらい、主体的学び、対話的学び、深い学び、UD、評価、学力テスト結果、授業改善のための生徒アンケート分析結果等。研修の立案・準備・運営は、学力Lを活用した。

(4) 継続的検証・改善

本研究の管理を教頭に集約し、組織としてのPDCA、特にC・Aを確実に機能させた。毎月の職員会議で、管理職が本研究の直近の進捗や検証改善について指示指導を行

うことで、継続的なC・Dを実現した。

検証・改善の方法と機会は以下の通り。

- ア 職員会議での管理職の指示指導(毎月)
- イ UDラボでの協議と指示指導(毎週)
- ウ 学力Lによる参観授業振り返りにおける自己評価及び助言(全教員月2回)
- エ 生徒アンケート結果(年3回)
- オ 学力テスト、実力テスト結果
- カ 全教員振り返り・評価(学期毎年3回)

3 研究成果

目的1については、生徒は、授業や家庭学習で、自分で考え、積極的に発言したり、調べたり、間違いを恐れず挑戦できるようになってきている。このことは生徒アンケート相関分析からも裏付けられる。

目的2については、通年で会議を開催し、生徒の支援の方法や内容等について議論を積み重ね、工夫した支援が手厚くなった。当該生徒が自ら質問する様子が見られるようになった。

目的3については、校内研修も功奏して、教員の主体的・対話的・深い学びについての認識と実践力が向上し、生徒の資質能力が高まっていると評価できる。このことは公的な学力テストや市販のテスト等の結果の推移からも裏付けられる。

目的4については、教員が授業改善の中で、単元を見通すこと、生徒が見方・考え方を働かせる授業をすることが、標準として認知され始めた。このことは学期ごとの学校課題研究まとめからも裏付けられる。

目的5については、職員室での会話に、授業中の生徒の様子が多く登場することになった。また学力テスト等の向上を目指して主体的に取り組むようになった。

4 今後の課題

生徒については、次年度、新学級の中で、獲得した主体性をさらに伸ばすことである。教員については、参観授業の観点を意味の理解を深めることで、自身の成果を言語化し自覚して、自身の課題の解決への道筋を具体的に描き、実践への意欲を高め、教員生活を充実させることである。

研究分野 学校課題研究

研究主題 「主体的に学び、互いに高め合う生徒の育成」

～自ら課題を設定し、自分の考えをきちんと発信できる生徒の育成～

学校名 栃木市立大平南中学校

校長名 毛塚修一

研究者 櫻井 誉 教諭（教務主任）、酒井 吉宗 教諭（学習指導主任）

1 研究目的

本研究は、単元レベルで授業を構想し、生徒が学習を自分事として捉える授業づくりを通して、自ら課題を設定し、自分の考えを的確に発信できる生徒の育成を目的とする。

2 研究内容

（1）重点内容

① 単元レベルでの授業デザインの充実

授業を一時間単位で捉えるのではなく、単元全体を見通した構想を行うことで、生徒が学習の目的や意義を理解し、主体的に取り組める授業を目指す。

各教科において単元計画を作成し、次の事項を明確にする。

- ・単元のねらい（何をできるようにするか）
- ・学習過程および時数配当
- ・評価方法（何を、どのように評価するか）

※特に「自分の考えを発信する場面」を単元内に位置付ける。

作成した単元計画は校内で共有し、職員室掲示や朝のミニ研修（朝カフェ）、現職教育の機会を活用して実践交流を行う。

② 自分の言葉で発信できる力（表現力）の育成

ア 指導の工夫

生徒の思考を促す発問の工夫、十分な思考時間の確保、対話の構造化などを通して主体的な学びを支援する。また、振り返り活動を充実させ、自己の学びを言語化する機会を意図的に設定する。

イ 評価の工夫

単元の終末に考えを表現するパフォーマンス課題（学習した知識・技能を活用し、実際に表現・実演する課題）を設定する。さらに、ルーブリック（到達水準を段階的

に示した評価基準）を活用し、思考の深まりや表現の質を可視化することで、生徒自身が学びの変容を実感できるようにする。

（2）研究の方法

- ・単元計画に基づく授業実践
 - ・研究授業および授業研究会の実施
 - ・生徒アンケートおよび振り返りシートの分析
 - ・ルーブリック評価の検証
- これらを通して授業改善の成果と課題を明らかにし、次年度の実践へとつなげる。

（3）期待される成果

本研究を通して、

- ・学習を自分事として捉える生徒の増加
- ・対話を通して思考を深める学習風土の醸成
- ・根拠をもって自分の考えを発信できる生徒の育成、が期待される。

また、教師にとっても単元構想力とファシリテーション力の向上が図られ、授業改善が組織的・継続的に推進されることが見込まれる。

3 研究成果

（1）アンケート方法

- | | |
|-------------------|--------------------------------|
| ① 実施日 | 令和8年3月3日 |
| ② 対象 | 栃木市立大平南中学校3年生 |
| ③ 人数 | 134名（無記名式） |
| ④ 回答 | 選択肢 |
| | 5 とてもそう思う |
| | 4 ややそう思う |
| | 3 どちらともいえない |
| | 2 あまりそう思わない |
| | 1 まったくそう思わない |
| ⑤ 質問内容 | |
| I 学習を「自分事」として捉える力 | |
| 1 | 学習の目的や意味を考えながら授業に取り組んでいる。 |
| 2 | 「なぜ学ぶのか」を意識して学習している。 |
| 3 | 課題に対して、自分なりの問いを持って取り組めるようになった。 |
| 4 | 1年前と比べて、学習を自分事として考えるようになった。 |

II 自ら課題を設定する力	
5	与えられた課題だけでなく、自分から疑問を見つけようとしている。
6	学習内容について「もっと知りたい」と思うことが増えた。
7	自分で学習計画を立てたり、見直しをもって取り組んだりしている。
8	1年前と比べて、自分から課題を考えることが増えた。
III 根拠をもって発信する力	
9	自分の考えを理由や根拠をつけて説明できる。
10	発表や話し合いで、自分の言葉で伝えようとしている。
11	友達の意見を参考にしながら、自分の考えを深めている。
12	1年前と比べて、自分の考えを根拠をもって話せるようになった。
IV 対話を通して思考を深める学習風土	
13	話し合いは、自分の考えを深めるのに役立っている。
14	友達の意見を聞くことで、新しい考えに気づくことがある。
15	学級には、安心して自分の意見を言える雰囲気がある。
16	1年前と比べて、話し合いの質が高まったと感じる。
V 周囲の変化（客観的視点）	
17	周りの友達は、1年前より自分の考えをはっきり伝えるようになった。
18	周りの友達は、以前より主体的に学習に取り組んでいる。

(2) アンケート結果

(単位：人)

質問	5	4	3	2	1	
I 自分事	1	40	56	30	6	2
	2	36	50	39	7	2
	3	43	46	28	13	4
	4	60	39	27	6	2
II 課題設定	5	41	44	35	11	3
	6	39	41	39	12	3
	7	31	44	39	14	6
	8	48	46	26	12	2
III 根拠	9	45	41	28	17	3
	10	49	41	30	10	4
	11	53	44	30	4	3
IV 対話	12	49	49	29	4	3
	13	60	38	26	8	2
	14	70	45	14	4	1
	15	57	42	20	10	5
V 周囲	16	58	42	24	5	5
	17	53	47	27	5	2
	18	55	46	23	6	4

① 学習を自分事として捉える生徒の増加

「質問4 1年前と比べて」という経年比較項目では、多くの生徒が「変化を実感している」と回答しており、単元のねらいを明確に示した授業構成が、生徒の学習観の変容に一定の効果をもたらしたと考えられる。

一方で、「質問3 自分なりの問いをもって主体的に学習に取り組む」までには至っていない生徒も一定数見られ、学習を自分事として捉える意識のさらなる定着が課題である。

② 自ら課題を設定する力の伸長

「質問5」「質問6」においては、肯定的回答は6割前後となり、一定の成果が見られた。単元全体を見通した問いの位置付けや振

り返し活動の充実が、生徒の内発的な問いの形成につながったと考えられる。

しかし、「質問7 自分で学習計画を立てる」は他項目と比べてやや低い傾向が見られ、主体的に学習を進める力の育成には課題が残ることが明らかとなった。

さらに、質問5～8すべてにおいて否定的な回答をしている生徒が一定数存在することも確認された。これは、問いをもって学習に取り組む姿勢が十分に定着していない層がいることを示しており、問いの生成を支援する段階的な指導や個に応じた働きかけの充実が求められる。

③ 根拠をもって発信する力の向上

「質問11」「質問12」では、肯定的回答が7割に達した。単元終末にパフォーマンス課題を設定し、評価の観点を可視化したことにより、生徒が発信の在り方を具体的に理解しつつあることが要因として考えられる。

④ 対話を通して思考を深める学習風土の醸成

対話に関する各項目では、高い肯定的回答が得られ、発問の工夫や対話の構造化、十分な思考時間の確保といった取組が、安心して意見を述べ合える学習環境づくりにつながったと考えられる。

⑤ 総括

本研究の取組は、

- ・学習を自分事として捉える意識の向上
- ・自ら問いを立てようとする姿勢の芽生え
- ・根拠をもって発信する力の伸長
- ・対話を通して学び合う風土の形成

において、成果を上げたと評価できる。特に、「1年前と比べてできるようになった」と回答する生徒が多数を占めたことは、生徒自身が自己の成長を実感していることを示しており、本研究の方向性の妥当性を裏付けるものである。

4 今後の課題

今後は、単元の導入や振り返りにおける学習の意味付けをより日常的・継続的に行い、一層、生徒一人一人が学習の目的を自覚しながら取り組めるようにする必要がある。

併せて、問いの立て方を段階的に支援する指導や、主体的に学習を進める力を育成するための具体的な手立てを一層充実させ、自ら課題を設定し学び続ける生徒の育成を目指していくことが今後の課題である。

研究分野 学校課題研究

研究主題 学校運営協議会を活用した、学校課題改善に向けた取組

学校または園名 栃木県立栃木特別支援学校

校長または園長名 校長 保坂 麻紀

研究者 職 氏名 主幹教諭 杉山真基、主幹教諭 栗田朋和、教諭 上澤孝一

1 研究目的

本校は栃木市の中央部に位置しており、知的障害教育部門、肢体不自由教育部門、病弱教育部門の三つの教育部門を有する特別支援学校である。

在籍する児童生徒は、栃木市、壬生町、鹿沼市南部、小山市、下野市、野木町と広域からも通学している。各市町との連携では、全ての市町と同じ連携を図ることに課題があり、将来児童生徒が地域で豊かな生活をしていくためには、児童生徒の力だけではなく、地域の様々な理解や協力が必要となる。地域住民や保護者等が、組織的・継続的に連携しながら、一体となって児童生徒の教育や魅力ある学校づくりに取り組んでいく中で、以下の二点について研究を進めたい。

- (1) 学校運営協議会の運用を通して、効果的に学校課題の改善を図っていく。
- (2) 学校運営の強化、及び地域の本校児童生徒への理解の広がりや社会とのつながりを築く。

2 研究経過・内容

第1回学校運営協議会

委員の方に学校の取組についての説明を行い、現在の課題等を共有し、本校の教育目標の達成に向けた話合いがスタートした。

第2回学校運営協議会

学校の課題から四つの部会を立ち上げ、熟議のテーマや部会の取組について話し合いを行った。各部会のテーマと話し合った内容は以下の通り。

① 未来 WAKUWAKU 部会

テーマ『卒業後の進路について考えよう』

- ・学校は手厚いが、卒業後はどこに助けを求め

ればよいのか

- ・地域・行政・民間との連携が必要

② 「地域と人の交流部会」

テーマ『学校と地域と一緒にできることは』

- ・地域行事への参加
- ・保護者同士のつながり
- ・地域での保護者のつながりの少なさ

③ 「学校教育支援部会」

テーマ『授業でこどもが豊かな体験をするには』

・他校や地域団体との交流による障害理解の促進

- ・情報発信の重要性

④ 「地域学校協働部会」

テーマ『子どもを核に双方向で連携できること』

- ・地域資源の活用・地域貢献
- ・地域行事を通じた卒業後の社会参加
- ・生徒、保護者による地域貢献活動

第3回学校運営協議会（拡大熟議）

学校運営協議会委員に加えて、本校全教員、元PTA役員の皆様など、総勢約150名で拡大熟議を行った。また、ファシリテーターとして、栃木県教育委員会生涯学習課、栃木県総合教育センター生涯学習部、下都賀教育事務所に御協力いただいた。



【拡大熟議の様子】

各グループで「できたらいいな!」という視点で様々なアイデアを出し合い、その中からぜ

ひ実現させたいアイデアを絞りこみ、そのアイデアを実現するために解決しなければならない課題について話し合いを行った。

第4回学校運営協議会

拡大熟議で出されたアイデアの実現のために、より具体的な話し合いを行った。

第5回学校運営協議会

次年度からの具体的な取組について、すぐできること、準備をしてから進めていくこと、時間をかけて行う取組を確認し、次年度の方向性について話し合った。

3 研究成果

コミュニティ・スクールとして新たな一步を踏み出し、地域と学校が一体となり、児童生徒の教育活動を支える仕組みの整備が進んだ。協議会で地域の知恵や力を学校運営に生かす取組が始まり、地域との交流や理解を深めることができ、当初の想定以上の効果を得ることができた。

例えば、野木町のスクールバス停留所に地域の協力により屋根を設置していただいたことで、雨天時の安全性や利便性が向上しただけでなく、保護者同士の会話が増え、自然な交流の場にもなった。また、協議会委員の仲介により、地域の祭りへ模擬店出店という形で保護者や児童生徒が参加できる体制が整い、継続的な地域参加が可能となった。地域の公民館で保護者の集まりの際には、本校高等部生がそこで作業製品の販売活動をさせていただくという貴重な体験の場を提供していただいた。



【皆川城址まつり】



【出張駄菓子屋】

さらに、学校周辺に買い物学習の場が少ないという課題を受け、校内で駄菓子屋を開いていたことで、多くの児童生徒が楽しみながら学習する機会を得ることができた。加えて、地域で行われる農業体験やイベントへの児童生徒の参

加について、検討が進められている。

地域の力を生かすことで、学校と地域とのつながりが広がり、児童生徒の学びや成長を支える環境、地域での活躍する場がより充実していくことを実感することができた。

4 今後の課題

コミュニティ・スクールの取組の中で、「児童生徒が将来、地域で豊かな生活を送るために」地域と学校、保護者が一体となってよりよい教育活動を生み出し、実現していくことが課題となる。

特に特別支援学校においては、児童生徒一人ひとりの特性や将来の生活像に応じた支援を、継続的に提供できる体制の確立が求められている。

コミュニティ・スクール導入初年度の段階では、地域の力を生かした取組や地域とのつながりを広げることができたが、地域との協働の在り方や役割分担、情報共有の方法などが十分に整理されておらず、持続可能な協働体制の構築は今後の取組となる。

今後は、地域と学校が相互に期待する役割を明確化し、児童生徒の学びと将来の地域生活をつなぐ具体的な教育活動を検討していきたい。